

44 たちおかやま 太刀岡山

1 3 2 2 m

山梨県

小林 晃

中央道で笹子トンネルを抜けるとまずは、南アルプスの大観が目に入るが、シニアである我々は視線をもう少し下げて前衛の山を眺めることにする。すると乾徳山や小檜山が目飛び込む。さらに進み韮崎に近づくと右手に深田久弥終焉の山・茅ヶ岳、その右手には小首をかしげた形の曲岳が目立つ。ところが



我が太刀岡山はなかなか識別できない。それもそのはず、太刀岡山は標高1300m足らずで、茅ヶ岳の深田久弥終焉の碑から見てもはるか下を見下ろす格好になる。しかもこの方向からの姿はコタツに丸まった猫みたいなものでまことに見栄えがしない。

この山を最も素晴らしい角度で眺めうるのは、甲府から亀沢川に沿って北上し、支流の清沢川右岸にある神戸集落を措いてない。ここから見上げる太刀岡山は、あたかも巨艦を舳先の下から見上げるがごとく立派で、山頂は天を衝くかの勢いだ。とうてい1300mクラスの山とは思えない。まさに、山椒は小粒でぴりりと辛い、というタイプの山といえよう。さらに足元の林道を西に回り込むと右上にはさみ岩が見えてくる。大きな岸壁の上に、2本の岩峰がじゃんけんのチョキのかっこうでのっぺいて、この山の1つのアクセントになっている。

太刀岡山の名にはまことに颯爽としていさぎよい響きがある。地元には、かつて日本武尊が東征の帰途立ち寄って、この山の山頂に自らの太刀を埋めた、との言い伝えがあり、最初は「太刀置き山」といわれていたが、いつからか「太刀岡山」になったということだ。

この山は『中央線から見える山』（山村正光著）や『山梨県の山』（山と溪谷社）に登場するが、『甲斐の山旅・甲州百山』（山村正光他共著）でも取り上げられていず、山溪の『日本の山1000』や国土地理院のいわゆる『1003山』にも登場しない。長い間、広く岳人から親しまれている山というほどではなく、鶺鴒の目鷹の目で面白い山はないかと探し出しては登る、といった、いわば通の岳人の山だった。

この山に県内外から多数の登山者が登るようになったのは、多分に1997年に山梨県が音頭をとって企画した「山梨百名山」に選ばれたことによると思われる。中高年の登山ブームの結果として、アルバイトが少ない割りにパフォーマンスの良い山が着目されるようになったという時代背景もあろう。

登る時期としては、春先、桜やツツジの花々の鑑賞とあわせて行くか、秋から初冬にかけて見事な紅葉を愛でつつ登るのが適当だ。殊に、足元の下芦沢集落の桜の満開の時期に

当たると最高だ。いずれにせよ真夏は避けたほうが無難だ。

バスを降りてしばらく車道を北上すると登山口のある下芦沢集落に着く。車の場合、登山口のやや北に7台ほど置ける駐車場がある。山の形は、北側を除けば、まるで洋菓子のモンブランケーキであって基部から大半は急な道を登らされるが、桧の植林地なので危ない感じはしない。中間辺で左手にあるのが、下から鉄に見えた岩の端部で、ここまで来ると谷からの風も心地よい。急坂を登りきると緩やかになり、赤松の間を進むとやがて三等三角点のある山頂に着く。ここからは甲府盆地を中心としてその左右の展望が開ける。登路を下るのは味気ない向きは、尾根を北上すると越路峠に出るのでここから平見城を経て戻ると良い。今日一日結構歩いたな、という充実感が得られる距離だ。



深田久弥終焉の山、茅ヶ岳と組み合わせて計画するといっそう興味深い。

二万五千図：茅ヶ岳

交通機関：甲府駅前から山梨交通 055-223-0821

御岳昇仙峡行き⇒清川下車 (備考：本数が少ないので電話で確認されたい)

問い合わせ先：甲斐市役所敷島支所 055-277-3111

最寄りの温泉：近くには無い